月刊 FALCOM MAGAZINE

Vol.158



目撃者0(?)の邪魔者がザナドゥに現れた！
も～っと集まれ！ ファルコム学園

ファルコムニュース
英雄伝説 碧の軌跡
ショートストーリーズ

10周年を記念して『東京ザナドゥ』新プロジェクトが始動！

FALCOM MAGAZINE

CONTENTS

『東京ザナドゥ』新プロジェクトが始動！



新ビジュアル＆ティザー＆トレーラーが公開!!

2015年に発売された『東京ザナドゥ』が2025年に10周年を迎えることを受け、新プロジェクトが始動したことが明らかに！『東京ザナドゥ』は首都「東京」の世界だったが、新プロジェクトの首都は「京都」。共通の世界観を持ちつつも、舞台設定は一新した、まったく新しい完全新作タイトルになっているようだ。新ビジュアルでは、主人公（？）らしきキャラクターが羽織を着ているなど、現代の古都・京都をイメージさせるようなワクワクが止まらない仕上がりとなっている。あわせて公開されたアナウンストレーラーには意味深なキーワードも……。今後の展開はティザーサイトをチェックしよう！

『東京ザナドゥ 新プロジェクト』ティザーサイト
https://www.falcom.co.jp/txk/

XANADU PROJECT

『東京ザナドゥ 新プロジェクト』アナウンストレーラー
https://youtu.be/WUMTWOPmnsM



『東京ザナドゥeX+』はNintendo Switch / PlayStation4で好評発売中!

2015年にPlayStation Vita『東京ザナドゥ』に追加ボイスや新シナリオを加え、グラフィック等もよりゴージャスになった『東京ザナドゥeX+』がNintendo Switch / PlayStation4で好評発売中。新プロジェクトの前に、日本ファルコム初となる現代劇の世界観を堪能しておけば、より新作を楽しめること間違いなしだ。



東京ザナドゥeX　好評発売中
- **プラットフォーム:** PlayStation4
- **ジャンル:** 都市型神話アクションRPG
- **プレイ人数:** 1人
- **CERO:** B[12歳以上対象]
- **価格:** パッケージ版:7,128円(税込) / DL版:6,091円(税込)



東京ザナドゥeX+ for Nintendo Switch　好評発売中
- **プラットフォーム:** Nintendo Switch
- **ジャンル:** 都市型神話アクションRPG
- **プレイ人数:** 1人
- **CERO:** B[12歳以上対象]
- **価格:** パッケージ版:5,280円(税込) / DL版:5,280円(税込)



発行：フィールドワイ　フィールドワイ公式HPはこちら➔www.field-y.co.jp
発売：メディアパル　ファルコムブックス公式HPはこちら➔www.field-y.co.jp/falcombooks


『英雄伝説 閃の軌跡』のアリサたちが魔法少女に!?
脚本家・山下憲一（TV アニメ『みんな集まれ！ファルコム学園』）と漫画家・さがら梨々（コミック『閃の軌跡』）の強力タッグが贈るシナリオブックが登場！　平穏な日常に突如現れた怪物。その時、アリサのキーホルダーが不思議な光に包まれて……!?
あなたにお届け!
愛と希望の流れ星!
魔法少女
まじかる★アリサ
決定稿
著：山下憲一
イラスト：さがら梨々
原作：日本ファルコム
好評発売中!
判型：A5正寸／ページ数：160／定価：1,300円（税別）／ISBN978-4-8021-3131-5
©Nihon Falcom Corp. All rights reserved. ©KENICHI YAMASHITA,RIRI SAGARA 2018 ©2018 FIELD-Y

★男は一旦、気を緩めると元には戻せない★



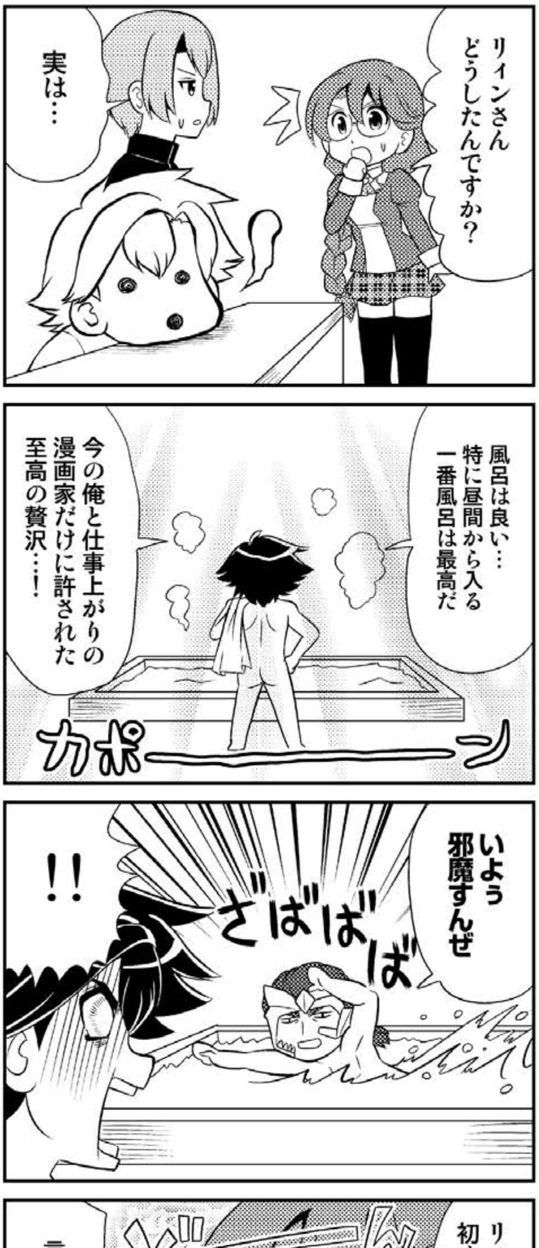
邪魔されたストライク



警察の見解と限界



邪魔された一番



君の権利だ



鏖殺のアリオッチ



邪魔された?ティータイム



典型的なワナ



邪魔されたなーちゃん



そそられる状況



老人の言いたいこと



皇帝の挑戦



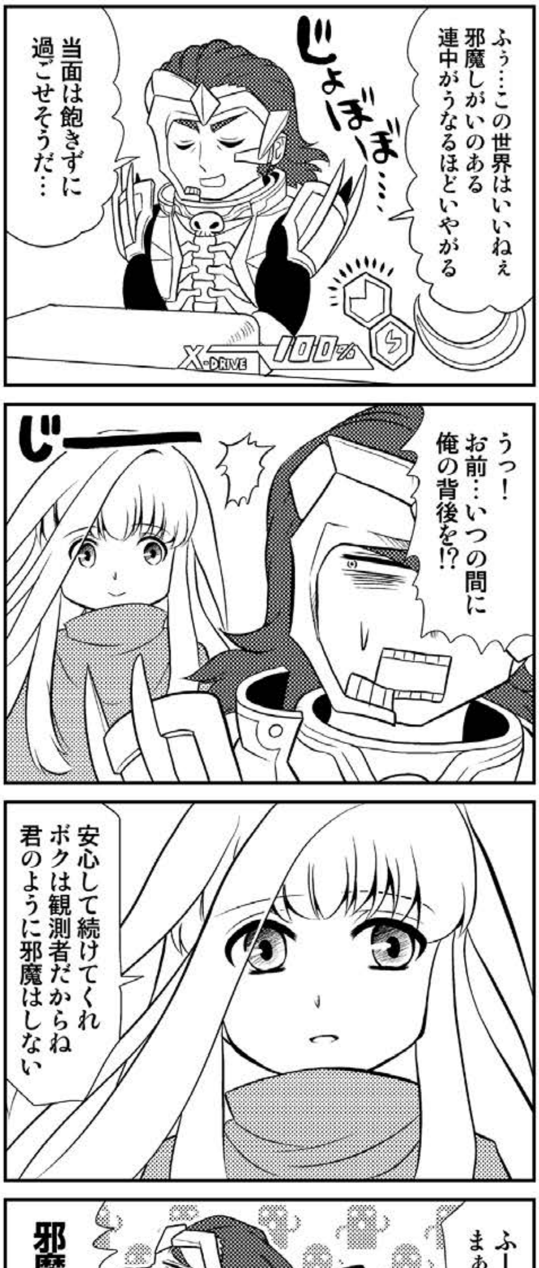
王冠を求めて



狙われていた者



邪魔された厄災



穏やかで騒がしい生活が戻ってきたファルコム学園。
徐々に英雄、戦士、さらには曲者までが還ってくるなか、
新たに「イースⅨ」のキャラクターも参戦！
まだまだ止まらない異能・新久保だいすけの筆が冴え渡る！

おまたせ！待望の第2巻だよ！



も～っと集まれ！
ファルコム学園②

新久保だいすけ

定価：本体 900 円＋税
ISBN 978-4-8021-3213-8

発行：フィールドワイ　フィールドワイ公式HPはこちら→ www.field-y.co.jp
発売：メディアパル　ファルコムブックス公式HPはこちら→ www.field-y.co.jp/falcombooks


英雄伝説 創の軌跡
THE MISERABLE SINNERS 01
漫画：墨天業
《仮面の隠者》《暗殺者》《自律人形》
それぞれの思惑を胸に
運命と真実に迫る物語
定価：1000円（本体909円+税）
ISBN978-4-8021-3309-8
発行：フィールドワイ 発売：メディアパル
©Nihon Falcom Corporation. All rights reserved.
©BOKUTENGOU ©Field-Y

▶ファルコムニュース◀

ファルコムファンに贈る最新ニュースをピックアップ！

ファルコムショップがリニューアルオープン！

新サービスとして、『《会員限定》ポイントシステム』『お支払い方法の追加（コンビニ･AmazonPay）』がスタートしました。さらに、ファルコムショップオリジナルの新作グッズが大量にラインナップ！











ファルコムショップ	ポイント交換商品
https://falcom.shop/	https://falcom.shop/point/item/list

ヴィレッジヴァンガードと「閃の軌跡IV」のコラボグッズが登場！「黎の軌跡II」の再販も決定！

「英雄伝説 閃の軌跡IV -THE END OF SAGA-」とVillage Vanguardのコラボグッズが登場。人気イラストレーター「てんてこ」さんが、「閃の軌跡IV」のキャラクターイラストを描き下ろし！ノスタルジーを感じる漫画風タッチで描かれた、クール&POPなリィンたちのイラストグッズは必見です。

さらに、前回企画にて販売の「黎の軌跡II -CRIMSON SiN-」とのコラボグッズも再販が決定。
EC受注＆期間限定販売のグッズなので、お見逃しなく。





■販売期間
2024年4月7日（日）23:59まで
お届け予定：2024年5月下旬～6月上旬

ヴィレッジヴァンガード公式通販サイト	商品情報ニュース
https://vvstore.jp/feature/detail/20162/	https://www.village-v.co.jp/news/item/18372

ファルコム電撃ストアオープン！

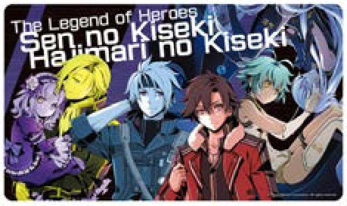
日本ファルコムと電撃が贈る公式オンラインストア「ファルコム電撃ストア」がオープン。ファルコムと電撃のコラボ商品や、電撃ならではの視点で作成されたグッズの数々にぜひご注目ください。

軌跡シリーズ20周年を記念した新商品の予約販売をスタート

ファルコム電撃ストアオープン記念として、上記商品を1点お買い上げごとに、特典ミニ缶バッジ（第1弾：13種）をもれなく1個プレゼント！
※絵柄はランダムとなります。
※商品の販売が終了次第、配布終了となります。









ファルコム電撃ストア
https://ebten.jp/falcom

EGGコンソール『イースII PC-8801mkIISR』配信中！

Windows向けレトロゲーム配信サービス・プロジェクトEGGのNintendo Switch展開である“EGGコンソール”に『イースII PC-8801mkIISR』が登場しました。





■配信日：2024年3月14日（木）

My Nintendo Store
https://store-jp.nintendo.com/list/software/70010000077526.html

Steam® /Xbox『DJMAX RESPECT V』×ファルコムコラボPackリリース！

韓国はじめ全世界で人気の音楽ゲーム『DJMAX RESPECT V』とファルコム楽曲がコラボレーション。Steam/Xbox版『DJMAX RESPECT V』にてファルコムコラボパックを配信中です。



▼楽曲リスト
- 明日への鼓動／英雄伝説 閃の軌跡
- Blue Destination／英雄伝説 閃の軌跡Ⅱ
- TO MAKE THE END OF BATTLE／イースⅡ
- GENESIS BEYOND THE BEGINNING／イース・オリジン
- Inevitable Struggle（Super Arrange Ver.）／英雄伝説 零/碧の軌跡
- 未来へ。／英雄伝説 閃の軌跡Ⅳ -THE END OF SAGA-
- NORSE WIND／イースⅨ -Monstrum NOX-
- 銀の意志／英雄伝説 空の軌跡FC
- STEP AHEAD／英雄伝説 閃の軌跡Ⅲ
- SUNSHINE COASTLINE／イースⅧ -Lacrimosa of DANA-

Steam® 版
https://store.steampowered.com/app/2829200/DJMAX_RESPECT_V__Falcom_PACK/?curator_clanid=36307828

Xbox版
https://www.xbox.com/ja-JP/games/store/djmax-respect-v-falcom-pack/9NDR6QVPBCTS


リベール王国次期女王たるわたくしの名に賭けて！
リベール王国に姿を現した、
結社《身喰らう蛇》の牙・執行者たち。
その動きと示し合わせたかのような
エレボニア帝国の不穏な行動に王国は揺れる。
そして物語は、古代ゼムリア文明の精華・
リベル＝アークへと飛翔する！
英雄伝説 空の軌跡SC
～絆の在り処～⑥
啄木鳥しんき
定価：1000円（本体909円+税） ISBN 978-4-8021-3294-7
発行：フィールドワイ 発売：メディアパル
©Nihon Falcom Corp. All rights reserved.
©Kitsutsuki Shinki
©FIELD-Y


FB ファルコムBOOKS
これを読むまで
しぬでないぞ!!
『月刊 Falcom magazine』に掲載された読み切りコミック 13 本を完全収録したコミックアンソロジーがついに登場！　新旧ファンも納得のラインナップで贈る、ファルコム愛溢れる1冊を是非ご堪能あれ！
カバーは『英雄伝説空の軌跡』コミカライズを担当した啄木鳥しんき先生の豪華描き下ろし♪
好評発売中!!
ふぁるこむコミックざんまい
収録テーマ作品
『イース』
『ブランディッシュ』
『ヴァンテージマスター』
『ぐるみん』
『ザナドゥネクスト』
『軌跡シリーズ』
価格：本体920円+税
ISBN 978-4-89610-818-7
©Nihon Falcom Corp. All right reserved.
発行：フィールドワイ
発売：メディアパル
フィールドワイのHPはこちら
www.field-y.co.jp

英雄伝説 碧の軌跡 ショートストーリーズ

特務支援課メンバー４人のことがもっと好きになる！



エレボニア帝国とカルバード共和国という二大国家に囲まれ、激動の中心地となっていたクロスベル自治州を舞台とする『零／碧の軌跡』。今回は、そこで様々な壁を乗り越えていったロイド・バニングスらクロスベル警察特務支援課メンバー４人の様々な一面を見ることができる『英雄伝説 碧の軌跡ショートストーリーズ』より「ティオの章」をお届け！

製品情報

好評発売中

著　　　　:田沢大典
イラスト:がおう(Ga-show)
定　　価:1,200円(税別)

ティオの章

なんでこんなことになってるんだよ。

ヨナ・セイクリッドは思わずそうつぶやいていた。

ここはエプスタイン財団の研究所にある、導力ネットワークのサーバー管理室である。綺麗に整頓された室内には、少し低めのテーブルの上に最新鋭の端末が並んでいる。その価値を知るものならば速攻で卒倒しかねないほどのお金と設備だ。ここで、研究所の中にある導力ネットワークを管理している。

ネットワーク研究者にとっては天国のような場所なのだが、ヨナにとってはここは牢屋と変わりがなかった。

「なんでこんなことになってんだよ……」

まったく同じセリフを再度つぶやき、ため息をつく。うなだれたヨナを、近くの席にいた研究者が見ていた。盛大にサボっているヨナの姿に一瞬眉根を寄せたが、そのまま無視して自分の仕事に戻っていった。

そもそも、なんでこうなったんだっけ?

ヨナはそう思い、記憶の糸をたぐり寄せはじめた。

クロスベルを襲った大事件『D∴G教団事件』。その解決後、ティオの所属するクロスベ

ル警察特務支援課は一時解散となった。この期にティオは、魔導杖（オーバルスタッフ）の性能報告をしようと、エプスタイン財団のロバーツ主任に、財団研究所への一時帰還を申し出る。

ここまではヨナにとっては関係のない話だったが、その話の流れでティオが、

「ヨナも連行しましょう」

と、思いついてしまった。

事件のどさくさにまぎれ、ＩＢＣ（クロスベル国際銀行）社のラボにもバックドアプログラムをしかけて楽しく遊んでいたヨナだったが、ティオがジオフロント内にあったヨナの隠れ家に突撃。同意しない場合は隠れ家の場所を警察へ通報すると言い、嫌がる彼を強引に連れ出し、財団研究所へ同行させた。

こうしてティオ、ヨナ、ロバーツの３人はクロスベルを出発し、レマン自治州にある財団研究所へと戻ってきた。ティオは本来の目的である魔導杖の性能報告作業に、ロバーツは主任なので主任業務に戻った。ヨナはというと、いったんは財団を脱走した立場であり、そもそも居場所がない。そこで上層部は、彼を行き詰まってる難題プロジェクトに参加させることにした。ヨナ自身もプロジェクトの難しさを聞き、逆にやる気をかき立てられ、熱心に仕事に打ち込んだ。

ヨナは天才的な頭脳を持ち、閃きでプログラムを作成するタイプだ。彼にかかれば、行き

詰ったプロジェクトが抱える難題も、『なんでこんな簡単なことが気づかないんだ？』と思えるほどたやすいことだった。彼は瞬時に脳内で新しいプログラムの骨子を組みあげてしまった。その点で、彼はまさに《天才》だった。

しかし、ここで別の問題が発生した。ヨナはプログラムを閃きで作ってしまうが故に、論理的に、かつチームで作っていく研究所の方法とは相性が悪かった。ヨナは脳内で組み上げたプログラムを、口頭で説明してすぐさま作成に取り掛かろうとした。しかし、他の研究員はヨナほどの天才ではない。みな、導力ネットワークの専門家であったし、秀才と呼ばれるような人材ではあった。だが、ヨナほどの《天才》ではなかった。ヨナの口頭の説明だけでは、プログラムの全容を把握しきれなかったのだ。

とはいえ、彼らも遊びでエプスタイン財団に勤めているわけではないし、秀才と呼ばれてきたプライドもある。そこで、自分たちが理解するための時間を稼ぐため、ヨナに仕様書を作ってはどうか、と提案してきた。

しかしヨナにとっては、脳内で一度組み上げたプログラムである。それを仕様書などという形に起こすこと自体に意味を感じなかった。仕様書にする時間があるぐらいなら、最初から組み上げてしまえばいい。できたプログラムに不満があるなら、瞬時に修正すればいい。実際彼はそれができるのだ。

ヨナはそのことを正直に言った。しかも彼ならではの口調で、思っていることをまったくオブラートにくるむことなく。『仕様書は時間のムダ』『ボクひとりで十分』『あんたらは好きなことしてればいい』『修正もひとりでやれる』『いいからとっととプログラム組んじゃおうぜ』

ヨナのこの言動は、他の研究員たちのプライドを大いに傷つけ、彼は大変な反感を買うことになってしまった。

こうして、諸手を挙げて歓迎された天才プログラマは、今やプロジェクトチームの中で好き勝手をする問題児、という扱いになっていて、ヨナも急速にやる気を失っていった。

そうなってしまうと、この仕事は『退屈』だった。常に刺激を求め、導力ネットの海をさまよっていたヨナにとって、『退屈』はなによりも恐ろしく、また忌み嫌っていたものだった。

だから今日も彼はつぶやいていた。

「あー、ダリィ」

今日何回目かの愚痴をこぼし、ヨナはイスにもたれかかり、天井を見上げた。

そんな様子を、廊下側にある窓から見ていたのは、ティオである。

「ヨナ、大人しく仕事をしていますね」

そう言ってから、最後につけ加えた。

放っておくと、いつまた逃げ出すとも限らない。そうティオは考えていた。とはいえ、今の彼女にとって大事なことは、ヨナのことではない。自分が抱えている仕事のことに頭を切り換えつつ、廊下を歩き出した。

「……今のところは」

今日のティオは、普段のダークブルーをベースとした服の上に、白衣を羽織っている。以前から研究員は白衣着用がある程度推奨されていたが、ティオにあうサイズがなかったため、彼女は着てこなかった。

それがこの度、晴れてティオにあうサイズ――というより、彼女専用のサイズ――が支給されることとなったのだ。ちなみに、手配を進めたのはロバーツ主任であり、はじめて着たときに満面の笑みを浮かべていた。その場でティオは白衣を脱ぎ捨てようとしたが、ロバーツの懇願により押しとどまったのだ。

実際着だすと、服の汚れなどを気にする必要もなく、ポケットも多いので便利だということに気づき、白衣を着ることへの抵抗感はなくなっていった。

研究所を白衣をはためかせて歩くティオ。彼女が向かった先は、研究所内の共用スペースである。建物の中だが、ガラス張りの壁面と高めの天井で開放感があり、外に植えられた緑

が目に鮮やかだ。スペースにはイスとテーブルがそなえつけられ、少し離れたところには自由に飲めるお茶のセットなどもある。昼食時ともなると、ここにパンやお弁当を持ち込んで食事をする研究者が多くいる。

今は午前中なので人影もまばらだ。ひとり静かに考え事をするのには持ってこいの時間である。

ティオはイスに腰掛け、持ってきたレポート用紙を広げ、ペンを握った。レポート用紙の一番上に、ペンを走らせる。

『魔導杖の実戦運用における問題点と対処法について』

年相応のやや丸みを帯びたかわいらしい字だが、書いている内容はそれと反して硬い。そして、次の行にペン先は向かった。

『サブウェポンとしての魔導杖の可能性』

ここまで一気に書いて、ティオはレポート用紙を見つめた。とんとん、とレポート用紙をペン先でつつき、サラサラとメモをする。

『パターンで考える』

『テストケースで具体的に』

『ロイドさん、エリィさん、ランディさん』

思いついたことをメモし、ペンを走らせていた手を止めて眺める。いけそうです、と小さくつぶやいた。
ティオの今の仕事は魔導杖の運用試験の結果を報告することである。とはいえ、具体的な数字は、ロバーツの手を経由して、すでに魔導杖開発チームには渡っていた。今すべきことは、もっと大ざっぱな話、いわばグランドデザインのところだ。
ティオは魔導杖一本で魔獣などと戦ってきた。特務支援課で積んできた経験からいうと、この方法には可能性と同時に限界を感じていた。魔導杖は確かに詠唱を必要としない点が魔法（アーツ）と異なり、また通常の剣や銃などと同じ、タイムラグなく隙が少ない攻撃を可能にしている。
とはいえ、大きな括りでいえば、ただの武器である。あらゆる武器には長所と短所があり、また得意とする人と不得手とする人がいる。それを明らかにすることで、魔導杖の新たな開発の方向性を見いだせないか、と考えていたのだ。
ティオは考えながら、メモを続けた。新たな開発の方向性、のところを四角く線で囲んで強調する。
ちなみに、ティオは導力ネットワーク端末を使って文書を作ることは可能である。むしろそちらの方がキーを叩くだけでいいので楽ではある。だが、こういう風に考えをまとめる際

には、紙とペンを使った方が効率的であると、ロイドに教わったのだ。いろいろな要素を検討し、つなぎ合わせ、まとめていく作業においては、紙とペンがもっとも効率的である、とロイドは語っていた。彼が事件の際、ホワイトボードに関係者の相関図などを分かりやすくまとめていくのを見ていたので、その言葉には説得力を感じていた。

「……では、はじめましょう」

そうつぶやいて、まずティオはランディのことを想像してみた。ランディなら魔導杖を使って、どのように戦うか、と考えていく。

ティオの想像の中のランディを、魔獣と対峙させる。ランディは魔導杖を持ってしげしげとそれを眺めていたが、すぐに魔獣と距離を取った。魔導杖は中距離での攻撃を得意とする武器なので、セオリー通りである。戦闘のプロであるランディらしい判断だった。

だが、何発か魔導杖で攻撃するものの、有効打を与えるに至らない。しかも、魔獣の攻撃を杖で受けることになってしまい、ランディは戸惑いを隠せないようだった。

すると、杖を捨てて、素手による格闘戦スタイルに持ち込んでしまった。あふれる腕力を使い、魔獣を素手で倒したランディを見てティオは

「……ダメですね」

はあ、とため息をつく。そもそも格闘戦を得意とするランディは、もっとも魔導杖と相性

が悪いのだ。とはいえ、この思考実験がまったく無駄だったわけではない。
ティオはレポート用紙にペンを走らせた。
『魔導杖自体の強度強化』
『実戦では不意打ちに対応するために組み合うことも』
実際、ティオ自身も敵との遭遇時、不意を打たれて魔導杖で攻撃を受け流したことが何度かある。その度に、壊れはしないかと冷や汗をかいた。魔導杖自体が丈夫になれば、このような状況にも多少は対応できるはずだ。
「いけそうです……」
自分の方法論に手応えを感じ、つぶやくティオ。今度はエリィが魔導杖を持った姿を想像する。魔導杖を手にしたエリィの姿は、銃を持っている時よりお嬢様っぽく見えるな、などとティオは考えた。それに、以前絵本で見た魔女のようだ、とも。そのままとんがり帽子にローブを羽織ったエリィの姿を想像する。想像の中のエリィはノリノリで、持っていた魔導杖をくるくるとステッキのように振り回し、ポーズを取った。
「……くっ」
ティオはひとりで肩を揺らして笑ってしまう。いけない、今は仕事の最中、と思い直し、魔女の格好からエリィの普段着に姿を戻す。

魔獣と対峙したエリィは、杖を振るい攻撃をしかける。杖のひと振りで放射状にアーツによる攻撃が広がると、驚きの表情を見せた。
エリィが普段使う導力銃は、単体のターゲットをピンポイントに狙うものである。対して魔導杖の攻撃は、放射状に広がる、いわば面攻撃である。
さらに、攻撃後、敵の反撃をかわすために取った間合いも、魔導杖の射程から外れてしまうものだった。導力銃に比べて、魔導杖の射程は短い。次の攻撃時に、射程が足りずに再度間合いをつめるという無駄な動きを取ってしまうエリィ。
そこで想像を止めて、ティオはペンを走らせた。
『点攻撃と面攻撃、その特性の違いを持ち手にレクチャーする必要あり』
エリィの普段の戦い方は、導力銃による遠距離攻撃と、アーツによる攻撃および援護、というものだ。銃というものの特徴を存分に生かした方法だが、現状の魔導杖とは異なる。魔導杖が導入される場合には、選択肢として導力銃と並べられるだろう。その際、それぞれの特徴を理解して選んでもらう方がいい。
ここまで一気に書き上げ、ティオは一度ペンを置いた。そのままイスから立ち上がり、お茶のセットが置いてあるところでお水をカップに汲み、戻ってきてテーブルに置いた。
再度イスに腰掛け、水を口に含む。冷やされた水が、身体に心地よい。気分を一新したティ

オは、さっきの作業の続きに取りかかった。
最後はロイドである。しかしティオは、魔導杖を持っているロイドがあまり想像がつかなかった。とりあえず、彼女の想像の中にあるロイドを引っ張り出してくる。
『ティオ』
いつもの服を着た、いつものロイドだ。
『元気でやってるか？　風邪とかひいてない？』
自分の頭の中で想像したロイドもひどく心配性なので、思わずティオは苦笑してしまう。
大丈夫です、主任もヨナも、元気でやっています。
そう返答すると、ロイドはよかった、と言ってはにかんだ笑顔を見せた。その笑顔を思い出し、そういえば、顔を合わせなくなってまだ一ヶ月も経っていないけれど、随分と長いこと会っていないような感覚だな、と気づく。
『仕方ないさ。特務課ができてから俺たち、ずっと一緒だったから』
ずっと、一緒。
その言葉に、少しティオの胸が熱くなる。研究所で魔導杖の開発をしていたころは、誰かと一緒だという感覚はほとんどなかった。研究員は仕事上だけのつきあいだったし、ロバーツはティオのことを気遣って——というより、嫌われることを恐れて——あまりベタベタは

してこなかった。幼い頃、悲しい事件に巻き込まれたティオにとって、特務支援課での日々は、ほぼはじめてに近い『他者と過ごす時間』だったのだ。

『ティオはどう？　寂しくない？』

寂しい……？

考えたこともなかった。今まで他人と濃密な時間を過ごすことがなかったティオにとって、『寂しい』という感覚はあまり意識してこなかったからだ。そのまま、自分の心に問いかける。

……寂しい、です。会えないのが。

『えっ？』

驚くロイドに向かって、ティオは答えた。

キーア分が、とっても不足しています。

『あははっ！』

想像の中のロイドが破顔一笑する。その笑顔につられて微笑んだその時。

「プラトーさん？」

いきなり外界からの刺激を受けて、ずっと内に向いていたティオの意識が急激に外に向く。ほんのわずかのタイムラグを置いて外界を認識すると、自分の目の前に何度か見かけた顔があった。

「ああ、よかった」
　そう言ってその青年ははにかむ。他の研究員と同じように白衣を着ているが、その下に着ているシャツは帝国の一流ブランドのものだ。スラリとした身で見事に着こなしている。
　顔立ちも整っている。ブロンドとブラウンの間、といった色合いの髪の毛は短めにまとめられ、整髪料によってラフにまとめられている。マスクは甘く、女性にもてそうな顔だな、とティオは自分のことを差し置いて考えていた。
「あの……何かご用でしょうか？　エメルトさん」
　ティオが記憶のふちから名前を引っ張り出して問いかける。彼の名前はマルセル・エメルト。帝国出身で、ティオが戻ってくる数ヶ月前からこの研究所に入った若手研究者だ。
「いえ、なんだかひとりで座って……」
　そこまで言って、マルセルは楽しそうに微笑んだ。
「しばらく難しい顔をしているかと思ったら、肩を揺らせて笑ったり、切なそうな顔をしたり、急に微笑んだり。いったい何をしているのかな、と思いまして」
　想像の中でロイドたちと話していた時に、いろいろ顔に出ていたらしい。ティオは恥ずかしくなったが、それ以上に黙って見ている相手の趣味の悪さにイラッと来た。
「……いつから見ていたんですか？」

「ついさっき」
嘘だ。この笑顔はかなり前から見ていたに違いない。ティオはいつものジト目で、マルセルをにらみつける。
「……少し、考え事をしていただけです」
「ああ、いやいや。気分を害されたのなら謝ります。あなたのされている研究は、弊社にとってもとても大事なものなのですからね」
わざとらしく謝るが、そこに誠意の一切を感じず、ティオはまたもイラッとしていた。
彼の言う『弊社』とは、ラインフォルト社のことである。ラインフォルト社は財団に多額の資金援助を行い、この研究所に研究室を開設した。そこでは、セプチウムを使った魔導関連の新規アイテムの開発が行われている。マルセルは、若くしてこの研究室の室長を務めていた。
「新しい魔導杖のあるべき形……魔導杖のスペシャリストであるプラトーさんと開発できるとは、光栄です。ともに協力しあい、次世代の魔導杖開発を成功させましょう」
マルセルの研究室が作ろうとしているのは、ティオの持つ魔導杖、その量産型ともいうべきものだった。精巧なパーツを使い、卓越した術者によって運用される現状の魔導杖は確かに強力な武器ではあるが、運用が難しすぎるきらいがある。

そこで、もっと量産ができ、安価で、容易に扱える。そんな魔導杖を作りたいとラインフォルト社は考えた。

ティオははじめてこの話を聞いた時に、

「いかにも武器屋さんが考えそうなことです」

とひと言で切って捨てた。

戦闘のスペシャリストであるランディとの雑談の中で、兵器というものはどう生まれ、どう普遍化され、そしてどう災禍をまき散らしたのか、という話を聞いていたからだ。ランディの言を借りるならば、魔導杖はテスト段階が終わり、実用段階に入ったことになる。これからはより多くの人が魔導杖を持つことになるだろう。

ティオのように体格に恵まれず、体術なども会得していない者がそれでも武器を持たなくてはいけない時、魔導杖は導力銃などと並ぶ『力』となるだろう。それによって救われる命もあるはずだ。

だが、同時に大量生産されれば、それは戦争の道具ともなり得る。それもまた、導力銃と同じだ。特にラインフォルト社は、導力銃をはじめ、さまざまな種類の武器を作っている会社だ。その多くが、帝国軍に納品されている。そこが目をつけたということは、魔導杖を本格的に軍の中で運用するつもりなのだろう。正直、あまり気分のいいものではない。

とはいえ、ティオは子どものように次世代魔導杖の開発を拒否することはしなかった。そんなことをしても、自分の代わりの人間が開発にたずさわり、世の中に量産型の魔導杖が出ることは明白だったからだ。

それならば、せめて自分の目の届くところで、よりよいものを作りたかった。例えば行商人が、街から街への街道を歩く時に、万が一魔獣に襲撃されてもなんとか身を守れるように。それによって助かる命があると信じて。ティオが自分なりに答えを出した『自分にできること』だった。

とはいえ、マルセルの言動は、ティオの癇にいちいち障った。やっぱり彼女の中で、次世代魔導杖の開発と、それにたずさわるラインフォルト社の人間は、好かないものだったのだ。そんなティオの気持ちを知ってか知らずか、マルセルがわざとらしく会釈をする。

「それでは、私も仕事に戻ります。そうだ、今度研究室に遊びに来てください。プラトーさんなら、大歓迎ですよ」

その言葉にティオは沈黙で答えた。ティオのジト目に見送られ、マルセルが立ち去る。彼が立ち去った後、ティオはひとつため息をつき、レポート用紙とペンを小脇に抱えて、空のカップを手に持ち立ち上がった。そして、ぽつりとつぶやく。

「…………変な顔、してたんでしょうか」

またも顔を赤らめ、足早にその場を立ち去った。

†

ネットワーク管理室でダルそうにイスに座っていたヨナは、いきなりすっくと立ち上がった。

「トイレトイレ〜っと」

パーカーのポケットに手を突っ込んで、わざと他の研究者に聞こえるようにしながら廊下に出る。管理室からトイレはすぐそこだったが、ヨナはトイレに目もくれず廊下をそのまま先に進んだ。

「マジメにやってられっかよ」

そう言って、ペロリと舌を出す。ヨナはこうして、仕事中にも関わらずプラプラと出歩くクセがついていた。

ヨナが居た頃に比べ、この研究所も拡張がされていて、見知らぬ場所がいくつもある。中

には極秘の研究がなされているらしき部屋もあり、この前は警備員にあやうく見つかりかけたりもした。それでもヨナがこの探索をやめない理由はただひとつ、『面白そうだから』である。

今日も気の向くまま、白くて無機質な廊下を歩いていると、ひとつだけドアが開け放たれた研究室を見つけた。スパイにでもなった気分で、ヨナは足音をしのばせ近づく。ドアの横にあるプレートには、

『ラインフォルト社・次世代魔導技術開発チーム・エプスタイン財団研究所分室』

と、長くて仰々しい名前が掲げられていた。

「ラインフォルト社か……」

導力ネットでも、ラインフォルト社の名前は有名だった。帝国軍の多くの武器を納入している大企業。そこの分室がここだ。ヨナも男の子である。何かしらの新兵器の開発をしているのではないか、という好奇心がムクムクと頭をもたげてきていた。

「ま、開けっ放しで不用心なのが悪いってことで」

誰に言うともなくそうつぶやき、身をかがめてスルッと研究室の中に入った。

部屋の中は薄暗くなっており、導力ネットワーク端末の画面の灯りだけが、部屋をほのかに照らしている。どうやら室内に人はいないらしく、人気はない。そんな中、部屋の中央、

やや奥まった場所に、多数のケーブルに繋がれた錫杖のようなものが、透明なケースの中に格納されていた。
そこまで身をかがめながら歩いて行き、ヨナは下からそのケースを見上げた。
「これ……ティオが使ってる、アレだよな？」
アレ、とは魔導杖のことだった。ティオが持つものとシルエットは近しいが、さまざまなディティールが異なる。パーツが多く、いかにも機械という雰囲気を持つティオのそれとは異なり、あまり出っ張りなどはなく、いくつかのブロックに簡単に分けられるような構造になっているようだった。
ここにあるものは、次世代魔導杖、そのテスト機だった。
「……なるほど、それで」
ヨナも情報としてラインフォルト社が研究室をここに持っていること、ティオが魔導杖についてあれこれとレポートをまとめていることは知っていたので、すぐにこれがなんなのか察したようだった。しかし、これはヨナの知的好奇心を満たすようなものではなかったらしい。
「つまんねぇの。もっとこう、導力銃の最新型とかさ、すんげービームみたいなのが出るやつとかならいいのに」

そう言って、部屋を出ようと踵を返したその瞬間。
部屋中に耳をつんざくようなアラート音が響いた。それと同時に、部屋中の導力ネットワークの端末画面が赤と黄色の点滅をはじめる。
「ななっ、なんだ⁉」
驚いたヨナは、チカチカと点滅を繰り返す端末画面を覗き込んだ。その表情が、一瞬で険しいものに変わる。
「……なんで、こんなもんがあるんだ？」
このまま放っておくとマズい、と直感で判断する。しかし、自分がここに忍び込んだことがバレてしまうのはもっとマズい。どうすれば……とヨナが逡巡していると。
「――おい、そこに誰かいるのか！」
マズい、とヨナが思った瞬間には、声をかけてきた人物がけたたましい足音とともに部屋に踏み込んできた。

†

ヨナがラインフォルト社の研究室で何かをやらかした。
そう聞いて現場に駆けつけたティオを待っていたのは、むくれるヨナと、オタオタとしているロバーツ、そしてひどく不機嫌そうな表情のマルセルだった。
「ヨナ……！」
ティオは軽く肩で息をしつつ、ヨナに詰め寄る。
「いったい何を……」
「ハッキングですよ、プラトーさん」
ヨナが口を開く前に、マルセルが言った。ティオは驚いてマルセルの方を見る。
「ハッキング……？」
「我々がここで、新型魔導杖の研究開発をしているのはご存じでしょう？　その魔導杖のあるシステムの起動実験を行おうとしていたんです。準備が整って、軽い休憩の後にさぁ実験を、と思ったところで、研究室の方が騒がしい。何事かと来てみれば……」
マルセルはヨナをチラリと横目で見た。
「このヨナ君が、端末をいじってましてね。何事かと思ったら、システムにハッキングをしかけていた。そして、新型魔導杖は、ご覧の通りです」

マルセルが顎で指し示す。そちらを見ると、杖らしき形をした、黒焦げの物体があった。ティオの持つ魔導杖と形がやや似ているようだが、なにせ黒焦げになっているので細かいことは分からない。どうやら、あれがラインフォルト社が開発しているという新型魔導杖のようだった。

ロバーツが、がっくりと肩を落としてティオに話しかけてきた。

「僕も騒ぎを聞きつけて飛んできたんだよ。そうしたらもう、こんな状況になっちゃって……」

「ボクじゃないっつーの！」

ロバーツの声を遮るようにして、ヨナが叫んだ。

「システムには最初からウイルスが仕込まれてたんだよ！　……っつーか、あれはどう考えてもウイルスなんかじゃねーよ。あらかじめ暴走するよう装置自体に何らかの仕掛けが組込まれてたんだ！　それで、ヤベって思ってたらこいつらが来てさ……」

捕まった、ということなのだろう。ティオはひとつため息をつき、ヨナに尋ねた。

「……ヨナ。あなたはどうしてここに？　仕事があったハズでは？」

それは、と言って口ごもる。マルセルが不機嫌な表情を崩さずに言った。

「彼の所属部署に確認しましたが、トイレに行く、と言って抜け出していたそうです。そして、

我々の研究室に無断で侵入したと」

「カギが開いていたからといって、勝手に入っていいというわけではありません」

「……カギが開いてたんだよ！」

脱力した様子で、ティオが言う。それを聞いて、ヨナはそっぽを向いてしまった。

状況はだいたい把握した。しかし、ティオにはいくつかひっかかることがあった。

まず、ヨナがいくらイタズラ好きとは言え、今回のように突発的な犯行に及ぶことはあまりない。どちらかというと用意周到に準備をし、細工に凝ってイタズラをしかけるタイプだ。それゆえに大がかりになり、結果として被害も大きくなってしまうのだが。

それに、ラインフォルト社の研究室が、どうやらかなり無防備な状況にあったことも気になっていた。帝国の軍需産業の一翼を担うラインフォルト社は会社規模も大きく、機密事項に関する情報が扱われることも多いため、管理は徹底しているはずだ。所属する研究員・開発者も有能ぞろいである。マルセルも、言動がいちいち引っかかるが、彼が優秀な人材であろうことは、ティオにも分かっていた。その有能な集団が、これから起動実験をするデバイスを放置して、しかもカギもかけずに、さらに言うならばひとりの監視者もつけずにその場を離れる……あまりにも不自然すぎた。これがもし偶然というのなら、万にひとつもない偶然だ。

そんなことをティオが考えていると、マルセルが口火を切った。
「考えたくはありませんが、彼がどこかから資金提供を受けた企業スパイ、という可能性もある」
「……！」
ティオが驚いて目を見開く。しかしマルセルは、さもありなん、という表情で続けた。
「聞けば、彼はかつて導力ネットワークの破壊行為によって財団に多大な損害を与え、クロスベルへ逃亡したというではありませんか。その件といい今回の件といい、まるで何者かの意志によって妨害を仕掛けているように見えますがね」
「バッ……そんなんじゃねーよ！　ボクは情報で金は取るけど、ぶっ壊すためには……」
「君は黙っていたまえ！」
ヨナの反論を、ピシャリと叩きつけるような言葉で遮る。
「今回の件、ラインフォルト社としては正式に研究所に抗議せざるを得ません。しかも、かなり厳しい態度で」
まるで役者がセリフを読み上げるように、よどみなく言葉を紡ぐマルセル。
いや、実際に用意したセリフなのだろう——とティオは直感した。
そもそも、すべて都合が良すぎるのだ。昼休みでもないのに鍵もかけられていない無人の

研究室、『たまたま』設定され準備段階にあったデバイス起動試験。そこにフラフラと入り込んだ、ヒマをもてあました過去に傷のあるハッカー。
すべてが仕組まれていたとしたら。彼らはなんの目的でこの茶番をお膳立てしたのか？
「あ、あのぅ……」
ロバーツが、額に浮かべた汗をかきつつマルセルに問いかける。マルセルは、まるで虫を見るかのような目でロバーツを見やり、吐き捨てるように言った。
「これは責任問題ですよ、ロバーツ主任」
苦虫をかみつぶしたような表情をしていたが、その目は違った。これは、弱い者いじめをして楽しんでいる目だ。かつていやというほど対峙したその目を見て、ティオは嫌悪感を新たにした。
「これほどの重大な過失事件となれば、あなたもただでは済まない。覚悟をしていただきたい」
その言葉に、ロバーツが哀れなほど汗をかき、身体を小さくする。
「そ、そこをなんとか！　ヨナ君も、悪気があってやったわけではないと思いますし……」
そんな言い訳をしたところで、まったく意味はない、とティオは言いかけてやめた。ロバーツもそんなことは百も承知だろう。だが、それでもなお擁護せざるを得ないのだ。
「……そもそも部屋を無防備な状態で放置していたのは、そちらでは？」

ティオが反論を試みる。だが、それすらもマルセルの中では織り込み済みだったようだ。
「なるほど、確かにこちらにもプラトーさんのおっしゃるような非はあります。……ですが」
マルセルは、わざとらしくヨナをにらみつける。
「鍵をかけ忘れたから、泥棒に入られて好き放題されても仕方がない。泥棒は無罪放免……そんな法は、どこの国も採用はしていません。違いますか？」
「だからボクはドロボーなんかじゃ……！」
「ヨナは黙っていてください。話がややこしくなります」
「なんだと……！」
色めきだつヨナを、ロバーツがなだめようとする。
「ま、まぁまぁヨナ君、ここはひとつ穏便に……」
「こっちはケンカふっかけられてんだぞ⁉　大人しくなんかできっこねーよ！」
案の定、ヨナの怒りの矛先はロバーツに向けられた。どうしてこうこの人は、やっかいごとを拡大するのだろう、とティオは内心でため息をついた。
「ケンカ、とは聞き捨てなりませんね。我々は被害者なんですよ」
ヨナのうかつなひと言は、さらなる延焼を招いたようだ。
「ふざけんじゃねーよ！　人を勝手に犯人扱いしやがって！　だいたいボクはやってねーっ

てずっと言ってるじゃんか！」
「君の言い分などは聞いていない！　元脱走者で後ろ暗いところがあるハッカーの証言など、取り上げるに値するとでも言うのかね？」
相手を射殺(いころ)さんばかりににらみつけるヨナ。その視線を冷徹な表情で受け流すマルセル。事態は膠着している。どちらかが折れない限り、この話は決着がつかない。そして、ラインフォルト社側が折れる可能性は万にひとつもなかった。
この危機的な状況をどうにか覆せないか？　ティオはずっと考え続けていた。だが、よいアイデアは出なかった。あらゆる状況が、ティオたちに不利に働いていた。
「……何も我々は、あなたがたといたずらに対立したいわけではない」
それまで厳しい表情をしていたマルセルの顔が緩んだ。
「我々も鬼ではない。もとより、ヨナ君とロバーツ主任に責任を取っていただいたところで、失われてしまった実験結果が戻ってくるわけではありませんし」
チクリと皮肉もこめつつ、あくまで優しい声色で話す。だが、ティオは知っている。これは相手にトドメを刺す前に、舌なめずりをしているのだと。
「我々は、魔導杖に関する実験をしていました。残念ながらそれは無に帰してしまったわけですが……」

やはり来た。マルセルは取引をするつもりなのだ。今回の過失の責任を取るという形で、ティオやロバーツに無理難題を要求するつもりだろう。

いったいどんな要求なのか？　もし万が一、ティオやロバーツにラインフォルト社への移籍を迫るようなことがあれば……そう想像して、ティオは背筋が寒くなるのを感じた。

「我々としても、代替の技術があるなら、それに越したことはない」

ティオが考え事をしている間にも、ロバーツは話を進めていた。だが、それはティオの想像とは少し違っていた。

「あなたがたの持っている魔導杖に関する技術の開示をしていただければ、特別に許しましょう。なんと言いましたっけ……《エイオンシステム》、でしたか。特にあのシステムは興味深い」

思わずティオは絶句した。まさか《エイオンシステム》を要求するとは、想像だにしていなかったからだ。どうしたものか、と考える間もなく、横でロバーツが大きく息を飲んだ。

おずおずとマルセルに声をかける。

「あ、あのう、さすがにそれはちょっと……」

「渡せないというのですか？」

マルセルの声色が再び厳しいものに変わる。いや、さっきよりも鋭さを増していた。

「これだけの事態を起こしておきながら、まだご理解いただけない、と？」

険しい表情のマルセルは、その顔をロバーツに近づける。気圧されたようにロバーツが後ろに下がるが、マルセルは構わずさらに一歩前に詰め寄り、唾を飛ばさんばかりの勢いで怒鳴りつけた。

「いいですかロバーツ主任！　事と次第によっては、一企業だけの問題ではない！　外交問題にすら発展しかねないのですよこれは！　我がラインフォルト社は、帝国軍に多くの物品を納入している！　その情報をスパイしたとなれば、その少年は国際法に則り我が国に連行した上で射殺だ‼」

穏やかではない言葉が出てきて、さすがのヨナも顔を青ざめさせた。ティオも、脅しだろうとたかをくくっていたが、彼の剣幕を見て本当にヨナを帝国に連れて行きかねないと思いはじめていた。

一番たまらないのは、怒鳴られているロバーツだ。耳元で騒がれているので言葉の意味がどれだけちゃんと受け取れたかはわからないが、刺激的な単語の羅列と、なにより高圧的、というよりも恫喝まがいのマルセルの行動に、顔色は青色を通り越して真っ白になっていた。

そんなロバーツに、トドメとばかりにマルセルが怒鳴る。

「《エイオンシステム》を渡せばすべて許してやるというこちらの温情が分からないのか⁉　渡して楽になるか、渡さずにお前達全員首になった上で帝国に連行されるのと、どっちがい

いんだ⁉」
「わ、渡します、渡しますっ！　《エイオンシステム》の情報をお渡ししますっ！　だ、だから っ、銃殺だけは勘弁をっ！」
マルセルのあまりの剣幕に、ロバーツはつい反射的に答えてしまっていた。
「主任……！」
ロバーツの言葉に、ティオが慌てる。《エイオンシステム》の情報を渡す――それが意味することを、主任は分かっているのだろうか？
「だ、だってティオ君、銃殺だよ⁉　僕たち死んじゃうんだよ⁉」
「それは、マルセルさんが言っているだけです。ちゃんと司法の場で争えば……」
そこまで言いかけて、マルセルが勝ち誇ったような笑みをしていることに気づいた。
「ちなみに、我が社が抱えている弁護士チームは大変優秀でね。国内法だけでなく、国際法にも明るい。万にひとつも勝ち目はないと思うが？」
その言葉に、ティオは押し黙るしかなかった。優秀かどうかはともかくとして、ラインフォルト社ほどの大企業なら、確実にお抱え弁護士はいるはずだ。兵器産業などという仄暗い世界と隣り合わせの会社なら尚更のこと。そしてその優秀さも折紙付きだろう。しかもこの場合の優秀さとは、弁護士として優秀なだけではない。何故か証人が謎の失踪を遂げて

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
しまうような事態をも作り出せることを指しているのだ。
死にたくなければ、ティオたちはマルセルの要求を受け入れるしかない。他に選択肢はないのだ。

「話はついたようですね」
マルセルが勝ち誇ったような笑みを浮かべてふたりに話しかける。
「……自分の研究がフイになったというのに、とてもうれしそうですね。」
「ええ、もちろんうれしいですよ。我々としても、あなたたち魔導杖の先駆者と事を構えたくはなかった。笑顔になるのは当然です」
皮肉も、綺麗に受け流されてしまった。
ロバーツが、おずおずと話しかける。
「あの、情報を開示すれば、本当にヨナ君は不問に……」
「もちろんです。この研究室の室長として、確かにお約束しましょう」
「あ……ありがとうございます！　では、《エイオンシステム》の情報を開示するということで」
「はい、よろしくお願いします」
ロバーツは安堵した表情で、マルセルはこれ以上ないほどの満面の笑みで。お互いに手を

差しだし、握手を交わす。
「そうだ。プラトーさん、あなたに証言者になって欲しい。確かにロバーツ主任は、情報の開示を許諾してくださったと」
マルセルの無駄に明るい声に、ティオは心底イラッとした。

†

それから数日後。
ティオとヨナは、ロバーツの主任室に来ていた。ここはロバーツが研究所内で仕事を行う場所だが、研究室にほぼ入り浸りなので、あまり使われることはない。従って、ティオとロバーツのお茶飲み場となっていた。そこに今日はヨナも混じって、三人でお茶をしている。
「……で、結局開示はしたものの……」
お茶をひと口飲み、ティオはつぶやいた。温かいお茶は気持ちをほっこりとさせる。だが、今のティオはお茶の味よりも大事なことがあった。

《エイオンシステム》の情報開示の件である。
お茶代わりに炭酸飲料を飲んでいたヨナが、やや気の抜けた答えを返した。
「……まさか、あんなことになるとはなぁ～」
確かに、ロバーツは《エイオンシステム》に関する情報を開示した。しかし、嬉々として『それ』を受け取ろうとしたマルセルたちは、困惑の表情を浮かべた。
そもそも、エイオンシステムとは、魔導杖と術者を繋ぐためのインターフェースの総称である。魔導杖に流れ込んでくる情報を術者に伝えるためのシステムなのだ。といっても、この『術者に伝える』がくせ者である。高価なクオーツや複雑怪奇なオーブメントシステムを組み込んだ魔導杖が処理できる情報は膨大だが、その情報を受け取るべき術者＝人間には膨大すぎて捌ききれない。だが、特殊な術者であるティオには可能である。ズバ抜けた感応力を持つティオなら。つまり、エイオンシステムとは、ティオという存在があってはじめて意味をなす――逆に言えば、それ単体ではただの機能のひとつだったのだ。
それをマルセルたちは、ティオたちが開発に携わっている魔導杖が持つ機能すべてを総称して《エイオンシステム》だと思いこんでいた。《エイオンシステム》という名の巨大なアーキテクチャがあると勘違いしていたのだ。
当然、彼らはエイオンシステム以外の情報開示も迫り、同時にロバーツやティオに対し、

技術協力をするよう申し出た。しかし、これに対してロバーツはとんでもない返答をしてしまったのだ。

『あの……開示するの《エイオンシステム》だけでしたよね？』

ティオが、いつものジト目でロバーツを見る。言われたロバーツは、美味そうに飲んでいたお茶を口から離し、ティオにいつもの困り顔を向けた。

「……主任も、とんだタヌキですね」

「タ、タヌキ？　僕がかい⁉」

「いいんです。今回のタヌキっぷりで、少し主任のことを見直しました」

エイオンシステムのことを言い出したのは向こうの方である。ティオは最初から、彼らの水準に扱える代物ではないと分かっていた。ロバーツも同じだろう。

だが、彼はそれが奪われてしまえばすべてを渡してしまうのとイコールだ、と見せかけた。一芝居打ったのだ。

当然、マルセルはこれに対し烈火のごとく怒り、反論した。我々の被った損害を考えれば、すべての情報を開示して当然である、とか、これでは詐欺ではないか、とか。

それに対してティオは、言い放った。
『わたし、ティオ・プラトーは証言者として、ロバーツ主任が《エイオンシステム》の情報開示をすること、それ一点のみしか明言していないことをここに証言します』
そのひと言を聞いて、マルセルは絶句した。ティオを証言者として任命したのは、他ならぬマルセルである。その彼女の証言を否定することは、道義上できない。
「アンタも大概じゃねーか」
炭酸飲料を瓶からラッパ飲みしながら、ヨナが呆れた様子で言う。いささかムッとした表情で、ティオが反論した。
「……隙を見せたのは相手の方です。わたしを証言者に、などという無駄なひと言を言わなければ、こんなことにはなりませんでした」
つまり今回の一件は、勝利を確信し、油断していた相手が見せた隙に綺麗につけ込み、みずからの落ち度と敗北を演じたロバーツの逆転勝ちというわけだ。しかも皮肉なことに、マルセルはロバーツの言葉の裏づけを、ロバーツ側の人間であるティオに保証させてしまった。
策士、策に溺れるとはこのことである。

とはいえ、かなり薄氷を踏むような状況であったことは確かだ。あの状況下で、見事な演技で華麗なる逆転の一手を打ったロバーツは、やはり並みの頭脳ではない、とティオは彼のことを見直していた。

それに、と言って少しうきうきとした口調でティオが続ける。

「本当にトドメを刺したのは、主任の言葉ですしね」

ティオをして『トドメ』と言ったのは、以下のようなものだった。

†

「アーキテクチャの開示、ですか？　あのー、どうしてそれが必要なのですか？」

マルセルから情報の開示を求められ、まず最初にロバーツが言ったのがこの言葉だった。

マルセルはあきれたように反論する。

「どうして、ですと⁉　そもそもそれがなければ……」

魔導杖は作れない――、と言いかけて止めた。その言葉を言うのは、彼のプライドが許さ

なかったのだ。そもそも彼は、頭脳の優秀さで出世したわけではなく、研究所という特殊な環境での権力闘争に特化して生き残ってきたに過ぎない。生粋の学者であり導力技術者であるロバーツとは、そもそも比べものにならないのだ。

そんな彼のちっぽけなプライドを、ロバーツはたったひと言で打ち砕いてしまった。

「だって魔導杖のひとつやふたつ、導力器の研究にたずさわっているものなら自分で作ってしまえばいいのでは……」

マルセルは思わず息を呑み、顔を真っ赤にして肩を震わせた。完全に侮辱された、と感じとったのだ。

「……ですが、我々の研究している、その、基本アーキテクチャと比較することで、より高度なシステムの構築をですね……」

恥辱に震えながら、マルセルはなんとか体裁を取り繕うために言葉を紡ぐ。しかし、その言葉をまたもロバーツは打ち砕いた。

「待って、待ってください。別のアーキテクチャと比較しても、意味なんかないじゃありませんか。思想が違うものを開発途中で取り入れることほど危険なことはありません。まず組み上げることはできなくなります。万が一組み上がったとしても、メンテナンスの煩雑さや機能拡張における制約など、デメリットが大きすぎます。マルセルさんほど優秀な人なら、

そんなことすぐに分かると思いますけど」
まるで、デキの悪い生徒が、うかつなひと言で教授に延々とダメ出しをされているような状態だった。実際、マルセルは学生時代に幾度となくこのような目にあってきていた。
うつむいてしまったマルセルのことが目に入っていないのか、ロバーツは明るい調子で続けた。
「あのぉ、ちょっと疑問なんですが、マルセルさんほどの人が、どうして既存のアーキテクチャにこだわったりするんですか?」
「失礼する‼」
マルセルは限界だったのか、もの凄い勢いでドアを締め、ロバーツの研究室から出て行ってしまった。残されたのは、事情がまったく飲み込めない様子のロバーツただひとりだった。

†

「……ということがあったそうです」

「うわ、キッツー！　『人に頼るなんてお前ってサイテーの無能野郎だな』って言ってるようなもんじゃん！」

「……主任、鬼ですね」

ヨナがケタケタと笑い、ティオが微かに微笑む。華麗なる逆転劇を見せた上で、相手にトドメを刺して抗戦の意欲を奪う。《エイオンシステム》によって、エプスタイン財団の魔導杖開発チームが、ラインフォルト社のそれとは比べものにならないほどすごいことを見せつけておいて、先のひと言である。これ以上ない、というパーフェクトな勝利だった。ロバーツも、さぞや溜飲を下げたことだろう、とティオは思った。

だが、そんなふたりの様子を見て、ロバーツは慌てた様子で言った。

「いやいやいやいや！　本当にそんなつもりじゃなかったんだよ！」

え、という表情で、ティオとヨナはロバーツを見る。

「《エイオンシステム》だけ情報開示してくれなんて言われて、ちょっとおかしいなーとは思ったんだ。だってほら、多分ラインフォルト社チームで開発している魔導杖はアーキテクチャが異なっているだろうし、それに無理矢理《エイオンシステム》なんて載せられないことくらい、研究者なら誰でも分かることだろう？」

誰にとがめられているわけでもないのに、言い訳のように一気にまくし立てる。ヨナがや

やあきれた様子で、ロバーツに尋ねた。

「あのさ、アーキテクチャが異なるとか以前のレベルで、あいつらとボクたちじゃ格が違いすぎじゃん。エイオンシステムなんてぜってー使いこなせないって分かってたし」

今度はロバーツが驚く番だった。

「そ、そうなの？　ホントに⁉　うーん、そうなのかなぁ……」

そう言いながら、ロバーツは腕組みをして考えこんだ。

「いやぁ、僕なんて研究者としてはまだまだだよ。だから勉強のために、マルセルさんが開発している魔導杖をぜひ見せて欲しいって前からずーっと言ってたぐらいだよ？」

つまりロバーツは、策謀を巡らしたのではなく、純粋に導力学者として発言していただけなのだ。しかも、自分の真の実力を知ることなく。

「……なんつーか」

「はい……本当にごくわずかですが、マルセルさんが哀れに思えてきました」

呆れてつぶやいて、ヨナとティオはそれぞれ飲み物を口にした。ひとりロバーツだけが、まったく分からない、といった感じで、ふたりを交互に見ていた。

温かいお茶でほっこりとしながら、ティオは心のメモ帳に書いていた。

天然は最強で、タチが悪いです、と。

「ところでその《エイオンシステム》の技術資料ですが……結局どうなったのですか?」
「それがさぁ～、聞いておくれよティオ君!」
ロバーツはさんざんな目にあったようで、ティオにすがりつかんばかりの勢いだ。その様子を見て、ティオはいつものジト目になった。
「……ウザイので聞きたくありません」
「ああっ! ごめん、ごめんよティオ君、ちゃんとマジメに話すから! だから……機嫌なおして、ね?」
いつものティオとロバーツのやりとりを見て、ヨナがやれやれ、といった様子で肩をすくめた。
「あの後、さすがに事が事だけにちゃんと上層部に報告したんだ。そうしたら、エラい人達の間で揉めちゃったらしくて」
《エイオンシステム》の情報をなかば恫喝で引き出したことについて、エプスタイン財団はラインフォルト社に正式に抗議。ラインフォルト社の社内調査チームが直々に乗りこんで来て、情報収集を行った結果、ウイルス騒ぎも研究室をわざと開けていたことも、すべてマルセルが独断専行で行ったことで、まったく進まない魔導杖開発に焦って一芝居打った、という結論が出た。



結局、マルセルはこの一件の責任を取り即日解雇れ、帝国へと帰された。
「マルセルさんは確かに怖い人だったけど、悪い人じゃないと思ってたから、ショックだよ……」
マルセルに脅されたというのにあまりにお人好しなロバーツの発言に、ティオはがっくりと肩を落とした。
「……主任、あの人のせいでクビにされかかったこと、忘れたんですか？」
「いや、まあそうなんだけど……あはは」
頭をかきながら、ばつが悪そうに笑うロバーツ。
ロバーツ自身も、当然だが責任問題に発展した。いくら脅されていたとはいえ、《エイオンシステム》という重要機密を上層部の許可無く漏洩したことは重大な過失だったからだ。
だが、導力ネットワークの責任者として代わりの人間が簡単には見つからないことと、ティオやヨナが事情を説明したことにより、情状酌量の余地があると判断され、数ヶ月間の減給という異例の軽い処分で済んだのだ。
「いやぁ、ティオ君やヨナ君が証言してくれたと聞いた時は、本当にうれしかったよぉ～！」
そう言いながらニコニコするロバーツ。その笑顔を見つめながらティオは、
『今さら新しい上司が来て、その人と人間関係を一から構築するのはめんどくさいです』

という思惑でロバーツをかばったことは黙っておこう、とそっと心の中で決めたのだった。

「まあ、結果としては」

ティオはそこで言葉を句切り、お茶をひと口、ずずーっとすする。ほぅ、と味を堪能してから続けた。

「ヨナと主任に大きな貸しがひとつずつできた……ということですね」

ヨナの抗議の声を右から左に聞き流しつつ、ティオはお茶を飲み干した。

英雄伝説 零の軌跡

FB ファルコムBOOKS

午後の紅茶にお砂糖を

著者：むらさきゆきや
イラスト：窪茶



日本ファルコムの大ヒット RPG『英雄伝説 零の軌跡／碧の軌跡』の主人公【特務支援課】は意外とまったり !? 本編とはひと味違った彼らのゆる〜い毎日を描いて『月刊ファルコムマガジン』で大人気を博したノベライズ作品が単行本で登場！

好評発売中!!

定価：1,100円+税

ISBN：978-4-89610-255-0

発行：フィールドワイ
発売：メディアパル

フィールドワイのHPはこちら → www.field-y.co.jp

FALCOM MAGAZINE SPECIAL プレゼント!!

アンケートにお答えいただいた方から抽選で
ここでしか手に入らないアイテムをプレゼント！



3名様

『も～っと集まれ！ファルコム学園』缶バッジ

大人気!! オリジナル缶バッジを5個セットで3名にプレゼント！ ※絵柄はランダムです。

ご応募は特設サイトまで▶ http://www.field-y.co.jp/root/falmagap/

メールでご応募の場合は下記フォーマットに記入のうえ、（falmaga@field-y.co.jp）まで
お送りください。当選者には編集部よりメールにてお知らせ致します。

件名：vol.158プレゼント係

1：お名前（ペンネーム可）

2：面白かった記事の番号→
　つまらなかった記事の番号→（記事一覧から1つずつ）

3：アンケート①『東京ザナドゥ』新プロジェクトに期待したいことは？
　アンケート②『東京ザナドゥ』の思い出は？

4：希望するプレゼント番号

5：ご意見・ご感想など

記事一覧

1：東京ザナドゥ新プロジェクト最新情報

2：も～っと集まれ！ファルコム学園

3：暁の軌跡最新情報

4：英雄伝説 碧の軌跡 ショートストーリーズ

応募締め切り　4月25日（木）

メールにてお送りいただくお名前やご住所等の情報は、商品の発送のためにのみ利用し、そのほかの目的には利用致しません。
また、情報は応募締め切り後3ヶ月を越えて保有することはありません。

月刊FALCOM MAGAZINE Vol.158

発行人	田中一寿
発行協力	日本ファルコム株式会社
編集	小渕智幸 河野崇
デザイン・DTP	株式会社 ACQUA
表紙ロゴデザイン	荻窪裕司（デザインクロッパー）
発行	株式会社フィールドワイ 〒 101-0062 東京都千代田区神田駿河台3-1-9　日光ビル3F TEL 03-5282-2211（代表） http://www.field-y.co.jp/